

雨のさまざま

—平安文学作品から—

関根慶子



冬の間、一か月も二か月も雨が降らず、からからに乾いた日々に、ふと雨の音を聞きつけた時のほっとした喜び、そんな時いつも私の口について出るのは、

春よ起きよと神のたまえば

恵みの雨の静かに降りて

雪霜きえゆき

野山も目さめぬ

という讃美歌である。雨と共に春は来る。そして天地は一斉に目を覚ますのである。雨と言えば、こうした恵みの雨から、美しい風情を添える雨、陰鬱なうつつうしい長雨、そしておそろしい猛威を振るって被害をもたらす豪雨にいたるまで、古代も今も

変ることがない。従って日本の古典に見られる雨も、同じくその種々相を描いているが、以下に平安時代の文学作品から、その幾つかを拾ってみよう。

まず古今和歌集春の部に、

わが背子が衣はる雨ふるごとに

野への緑ぞ色まさりける

(紀貫之)

というのがある。春雨の一雨ごとに野への緑色が鮮やかさを増して行くという、早春の躍動がリズムカルにとらえられている。わが背子(夫)の衣を張ると言って、その「はる」が「春雨」と掛詞になり、「衣」までは序詞であるが、そうした修辭上の技巧

が気にならず、わが夫の衣を張るという妻の心のときめきのようなものが、同時に春を迎えた心のときめきに響き合うようでないかない。

梅雨は、当時の日本では多く五月雨さみだれまたは長雨と言われている。平安朝の人々は、

服装や乗物などの関係から、そんな時期は

家に籠りがちで、何かにその鬱を紛らした

らしい。源氏物語帯木巻にある有名な「雨

夜の品定め」と言われる段も、源氏君をか

こんで集まった人々が、一日中降り暮らし

た雨夜のつれづれに、女性論に花を咲かせ

たのであるし、螢巻には、六条院という源

氏の豪邸にいる女性群が、例年にもまさる

長雨にあきあきして、絵物語などのすざびに日を暮らし、書いたり読んだりに紛らしている様が描かれる。中でもそれに熱中している玉鬘姫の所へ、源氏が寄って来てひやかす場面があり、源氏の口舌を借りてかの有名な物語論が展開されたりしている。

次に五月雨（梅雨）の特徴をよくとらえた幻巻の一節を挙げてみよう。

五月雨はいとどながめ暮らし給ふより
ほかのことなくさうさうしきに、十余
日の月はなやかにさし出でたる雲間の
めづらしきに、大将の君御前にさぶら
ひ給ふ。花橋の月かげにいときはやか
に見ゆる香りも、追風なつかしけれ
ば、千代をならせる声もせなんと、待
たるるほどに、にはかに立ちいづるむ
ら雲のけしきいとあやにくにて、いと
おどろおどろしう降りくる雨に添ひて
さと吹く風に、燈籠も吹きまどはして
空暗き心地するに……

幻巻は、紫上追悼の源氏の悲歎が一年の展開に沿って叙述される。梅雨は一層源氏を暗鬱に淋しくするが、一寸した晴間に思いがけなく満月に近い月が、花やかに照らし出した。それは美しい紫の上がぱっと明るく生前の姿を現わしたかの如き一瞬であって、源氏の前には息子の夕霧も控えていて、彼も生前一目見た紫の上の曙の樺椽にも似た姿を偲んでいるのであろう。月光に映えて、雨に洗われた橋の花も紫の上の香りを漂わすが如く、死出の国から来るといふ橋にゆかりの時鳥の声まで待たれると思ふ間もなく、また急に黒雲に覆われて、ざあざあと物凄い雨脚がたたきつけて来る。さっと吹く風に軒の吊燈籠の明りも吹き消されそうになって、また空も源氏の心も暗く閉される。ここには、五月雨の暗さの中の一時の明るさが、紫の上のイメージに重ねて描出されるのである。

雨後のすがすがしさや、しめやかさの美

は、やはり古典文学の素材に好んでとり入れられ、源氏物語でも人物の登場に織りまぜて情緒豊かに描出されるが、ここでは枕草子「九月ばかり夜一夜降り明かしつる雨の今朝はやみて……」の段について見よう。本文を引用する紙幅はないので大要をしるすと次のようになる。——一晚中雨量も多くて降り明かしたが、朝になると打って変って朝日がきらきらとさし、軒近い植込みの草木はしとどに露を含んでいるのもいい。蜘蛛の巣があちこちにちぎれ残っている所に雨が玉のようにかかって輝いている。萩など水を含んで重く枝を垂れているのが、日が高くなるにつれて、誰も手もふれないのに突然枝が動いて、びよんとはね上がるのも何とも面白い。——こうした文章のあとで作者は、自分が面白いと言ったことでも、人は面白くもあるまいと思ふと、それがまた面白い、とつけ加えている。枕草子には作者清少納言の自然美に対

する新鮮な感覚や新しい発見が表出されているが、この一段もそうした箇所であると
言えよう。

この里も夕立しけり浅茅生に

露のすがらぬ草の葉もなし

(源 俊頼)

これは、夕立の過ぎ去ったあとのすがすがしさを詠み得た歌として知られ、觀察の確かさにもすぐれている。平安後期の新風歌人「俊頼」の作である。

一方、恐ろしい暴威をほしのままにする
豪雨の有様も、日記・物語等の諸作品に見

られるが、その最たるものは、源氏物語の須磨・明石兩巻にわたって描かれることを一言するのみで、紙幅も超過したので筆を置く。
(お茶の水女子大学名誉教授)

雨



森下博三

雨、それは空から降ってくる水滴であつて、地上に降ってからは水という。降ってきたものが、結晶形を失わなければ雪といふ、一般的には地上に積んだものも雪というが、気象学では区別して積雪という。そしてこの雨と雪が混つて降れば「みぞれ(霰)」という。また透明な氷層と乳白色の乳層が交互になった、直径五ミリ以上の氷の塊であれば「ひょう(雹)」という。こ

れは摂氏零度以上と零度以下の気層の間をいったりきたりしたためで、雷雨のときなどにみうけられる。なお、冬に雪と一緒に降ってくる白色のもろい氷の塊を「雪あられ」といい、気温が摂氏零度よりも高いときに降るかたい氷の粒(ひょう)の小粒で、直径数ミリ以下のものを「氷あられ」といっている。そして、この雨、雪、雹、あ

つて、温かい空気におし上げられて上昇する。上昇するにしたがつて段々冷却し、